

ねこみ

猫 養 通 信

平成二年
(1990)
十月十五日発行
(年四回発行)

発行人 東 明雅
発行所 柏市つくしが丘2-2-12 東明雅 方
Te L. 0471-75-1192

連句遊戯説を廻って

東 明雅

「連句は要するに遊びだ」という説がある。私もそれは一面の真理だと思ふ。確かに連句は楽しい。尤も、楽しくなければこの忙しい現代に、誰が三時間も四時間も貴重な時間をつぶして、三十六句のひとつひとつに頭をひねり、一卷を作ろうとするだろうか。連句はまさに誰かも言った通り、最高の知的遊戯である。

だから、私は連句遊戯説を全面的に否定するものではない。まして、誰かが連句は全く遊戯であると信じ、そう主張することも否定しないつもりである。それは連句をどのように考えようとその人の自由であり、他人が干渉する余地はないからである。

しかし、その遊戯説の結果、結局は遊びであるから、式目など細かく言うのは野暮である。そんなものはいい加減にやって、とにかく、思いついたままを五、七、五なり、七、七なりで作って、前句に付け、三十六句出来上がれば大笑いして、めでたしめでたしで終る。これが連句なのだ、これが最高なのだということまで発展したらどうなるだろうか。そのように発展する可能性が大きいので心配である。

野球と将棋、これは正しく現代の遊戯の代表的なものであろう。しかし、野球にしても正式のグラウンドで厳密なルールに従ってやるからおもしろい。将棋にしても、正規の盤の上で、正しいルールに従ってやってこそ最高の楽しみとなるものだ。どうせ遊戯だからグラウンドも盤もいい加減、ルールもでたらめでやるのは草野球であり、縁台将棋である。

だからと言って、私は草野球や縁台将棋の楽しみを否定するものではない。ただ、

草野球なり縁台将棋の愛好者が、正しいルールを生命とする本式の野球、将棋の存在と意義を否定するようになれば、行き過ぎだと言ふまでの話である。

明治・大正までの連句は、まだまだルールに忠実であった。昭和の初めごろから、俳人ではあつても連句は全く無知な者たちが、俳句を作る余戯として、連句に手を出し、芭蕉の作品をちよつと齧っただけで、大体このようなものだろうという安易な考えで始め、真の伝統を何も知らないもの流れが、平成の今日では連句界の大勢を占めている。連句は遊戯だから、式目などは無視すべきだ、楽しめばよいのだという連中も、多くはそれらの流派に属している。

まあ、それは時代の流れかも知れないし、他人がいかにもルールなし、式目無視の連句を作ろうとも、それはその人の自由であり、その人たちの楽しみを奪うことはできない。奪おうとは思わない。

ただ、私は芭蕉が折角、芸術として完成し輝かしい七部集に示した俳諧の道を辿り、あくまで正しいルールは守って修業を続け、行くまで正しいルールは守って修業を続けて行こうと思う。そして、それが究極は、真に楽しい遊びの俳諧であると確信する。

にゃんと付くらむ

秋元 正江

加藤唐九郎が紫志野の誕生に、「ありや偶然じゃね、その偶然の色を出そうとして努力したかなかなか出なかった。中に隠れた色が現れてきたんじゃ、どこの土かと聞かれても地名ははっきりしないんじゃ、多治見の上の方の山じゃ、昔の人も随分土を探したんだろう。道に迷って難儀して崖

を伝つたり何とかどこかへ出ようとしていたらきれいな土が見えたでしょう。これは大変じゃ見たらうと思つたら転げ落ちて谷まで行っちゃった。それから這い上がって持ってきた。」と語っています。この話は何となく連句修業に通うところがあるではありませんか。やはりよい土は探さなくてはなりません。

連句のはじめは、付味よし、詩情ありと一人感動した付句も、種々な制約、つまり式目に障って駄目、思わずうーんと唸ってしまったものです。その稲架襖のような式目を抜け出し、これと思う付句を案じた時の充実した生命の透明感は一皮味わつたら忘れる事ができません。芭蕉からずっと続いて芦丈先生、明雅先生にご指導を頂く縁に恵まれ歳月を重ねてまいりました。

猫養は式目をしっかり身につけて、それを超えたところで捌きの美意識と詩情をもりこんで独自の香り高い作品をめざしたいと思ひます。連衆夫々の最も個性的な部分を付句に発揮し、その付句によって連衆を刺激し映発し合つて一卷をまく、このすばらしい時間を共有したいものです。

連句は虚構であれ、どこかに隠れた色が現れて、秘めたものも付句として自分だけの記念として入れることもでき、恋句では自由無礙に千夜一夜の世界に翅をひろげて遊ぶことも夢ではありません。

集 募

「猫養年間作品集」締切間近

平成二年十月末日締切

送り先 柏市加賀2-12-11

梅田 利子 方

(0471-7218119)

豊田好敏

目黒のさんま、ならぬ渋谷の連句は、昭和62年8月10日、中川哲さんと式田和子さんをかこんで、

盆の月書くことすべてまことなれ
を免句に、産声をあげました。

私の口から申すのもなんでございますが、つねにご連衆は多士済済で和気あいあい、ユニークなことは、まずよそのお席に一步もひけをとらないと思っています。

若手男性は、凡ちゃんと龜さん。龜さんと哲さん、和子さんのからむ初期の頃の句に、

芝麻布富士見えし町汐見坂
裾ひるがへしソバージュの君
わが胸においてなんぞと甘いこと
寝起きの一杯あとの雑炊
などは、丁々発止のやりとりです。

若手女性の恭子さんが登場して凡ちゃんとの恋句のやりとりは、

降誕祭を山で抱き合ふ
問ふ辛し問はぬはなほも恐ろしし
O型の俺親はB型

まあ、この時は連衆みんなが哲さんのお顔を見てしまいました。

鈴木美奈子さんは渋谷連句会が育てている貴重なお捌きのお一人です。その美奈子さんが捌いた二十韻「大晦日」で若手女性の、朋子さんの恋句です。

チチカカ湖インカは滅び月悠久
邯鄲の声抱擁の後
唇の黒き葡萄を唇へ

このような付け句は、朋子さんの独壇場じやないかと思えます。

渋谷連句会に尾口幾子さんという美しい独身のお嬢さんが来られています。この方

は、東明雅先生が江戸自由大学で連句の講義をされたときに、葉書で応募されて聴講され、その帰りに道でスカウトして、渋谷へ来ませんかとお誘いした方です。その句は山の湯に浸りて仰ぐ昼の月

こだまをかへす蜩の声
テニス部の追い出しコンバ秋暑し
ドラクエしつつぶソコンで株
懸賞で届けられたるささにしき
にんにく効かす網焼きの肉

長男の嫁の二の腕まぶしかり
くすぐったいわそんな揉みかた
月冴えてランダバ踊るベイサイド
熊の毛皮にこぼす熱燭

こうなると、私を除けば平均年齢三十歳くらいじゃないでしょうか。いかにも若々しく、発想がユニークで楽しくなります。

最近、渋谷連句会に熱心にお見えなられているのが、船本志紅さんと松田義夫さん。志紅さんは連句のベテランで義夫さんは俳風な絵をおかきになる、粋な方です。

月昇る諏訪湖に沿ひし一軒家
豆干す乙女類染めて立ち
断念の髪束ね切る秋の暮

やはり一味も二味も違いますね。今年に入ってから渋谷連句会にお入りになったベテランの方、中村ふみさん。A.C.Cで、私より大先輩でした。しかも免句がすばらしく嬉しいかぎりです。どのお席でも来る人、来なくなる人と様々でしょうがこのような素敵な連衆によって連句の種子が蒔かれていければ、やがては大きく広がって行くものと信じて精進を重ねたいと思っています。

落語、歌舞伎、戯作と「江戸」を遊んでいて、蕉風俳諧に行き当りました。初めて目にしたのは「冬の日」参考書として、明雅先生の「連句入門」をすすめられ、これを手がかりに「猿蓑」「炭俵」へ。芭蕉の名は知っていても、俳句も知らず、まして俳諧は全く知らなかったもので、新鮮な驚きがありました。

その頃、A.C.Cの「公開講座」に出てみると、なんと、あの「連句入門」の東先生のお教室がある。早速入門の手續を取りました。折りしも「江戸東京自由大学」の大茶会で、明雅先生はじめ大先輩の方々の座を拝見し、面白そうで（不謹慎ですみませ

ん）ますますやる気が出て来たのでした。骨董屋の小僧さんの如く、最初から最上のものばかりにめぐり会った訳で、大変幸運だったと思います。また、「芭蕉の恋句」のお蔭で、芭蕉を見直すことも出来、俳句への意欲も湧いてきました。

連句の良さは、新人でも先輩方と同じ座に加わって実作出来ることです。連衆独特の呼吸で「自分も作品を仕上げたのだ」という充足感に浸らせてくれます。実際は、自らの貧弱な詩藝を探っているうちに、もう先輩方の研ぎ上げた言葉が出てくるとい

う状態に舌を捲いただけなのですが、怖いもの知らずの新人の臆面のなさ、まだ厳しさにも直面せず、こころのままに、大いに連句の初心を楽しんでいるところ

連句は楽し

橋 文子

十番祭の笠着連句

「麻布十番のお祭で、笠着という珍しい連句のパフォーマンスをやります」と、猫蓑の式田さんからお話があり、面白好きのネコミノ記者、楽しみに出かけていった

「笠着」の会場となるブルーベティ2というブティックに入って行くと、「お早にお着きですね」と声があり、振返るとご亭主の式田さん、着物姿で座っておられる。一息入れる間もなく免句を示され、脇を付けなさいとのこと。

もたついているところへ、いつもながら江戸の粋を着流しているといった趣の哲さんが、浴衣姿でフラリと入ってこられる。ふっと力みが抜けたのか、脇句何とかクリアーすることが出来、助かった。

そうこうするうち、四宮連句の篤子さん遊さん、渋谷の美奈子さん志紅さんも繰り出してきて急に賑やかになる。鮮やかな付句をして風のように去った若い笑人さん、御夫婦で連句を楽しまれる早坂御夫妻も座を盛り上げて下さった。

かくして、付けては盆踊りの輪の中に入り、戻ってきては付けるといった具合で、十番祭の笠着ならではの趣向を楽しませて頂いた。

「笠着」は、蓑笠をつけた通りがかりの旅人や、農民町人といった普通の人々が参加して句を付けていくという、昔からの俳諧の行事である。古来、民間芸能等で、笠を被ったものは祖霊や神であるという伝承があり、笠着俳諧に集う大衆の警告は、為政者に畏怖され、尊重されたといわれる。

ネコミノ記者もいろいろと勉強をさせて頂いた一日だった。

来年も八月の「十番祭」で笠着を催すそうです。主催者よりぜひお越し下さいとのことでした。

(佛淵健悟)

ころも連句会 矢崎 藍

ここにちわ。ころも連句会です。十年ほど前から三河の矢作川のほとりで、連句をばつとやっております。

あのころ足助高校で國語の非常勤講師をしていた仲間の慶子さんの家に、近くの聖子、志津枝、時代さんたちが集まって「興の細道」を読んでいたので、そこへ私がまぎれこんだのは、彼女たちが代わる代わる腕をふるう、すてきなお昼の魅力が大でした。

時代さんの郷里である土佐の高知のブントンをちらした聖子さんアイディアのサーモンずしとか、同じ高校の美術講師の正子さんがさしいれてくれた、じゃがいも入りミートパイも、いまだに私のレパートリーです。

呑気な私たちは七部集を読んでから連句の実作にとびこみました。今思うとずいぶん無茶でした。でも私の偏見では、絶対に無茶の向うにはおもしろいものがあります。そして私たちは手さぐりしつつ、ちゃんと明雅先生にたどりつきましたものね。

「季刊連句」を読み、私や慶子さんがごくたまに関口芭蕉庵へおじゃまするといいう勉強が始まったところへ仲間入りしたのが、治子、都美子姉妹です。がんばりやの治子さんに大いに刺激を受けて、そう、このころようやく私たちの中で「あのね、御馳走は別の日にしよう」との反省が出るようになったんです。

実にケナゲなことではありませんか！かくて会場も棒の手会館とし、月例会での作品を各割きが明雅先生に送って添削していただく形が定着しました。一応作句ひとすじ。

この地の頼もしい仲間、高橋まよさん（あした）や斎藤吾朗さん（三河）との御縁を深めたのが毎年式田和子姉が開いてくださった名古屋暮雨巻での連句会です。

明雅先生もおいでになった初回は、名古屋でテレビや新聞が連句をとりあげた最初だったと思います。以後、猫蓑の諸姉兄がいらして御指導を受けることができました。そして一昨年六月に明雅先生御夫妻御来訪を機に正式発表会、男性を含む会員も増え、月一の勉強会もスタートしました。

取り柄は例のちよつと無茶さえふくむ楽天と実行力。「いつかいい作品を作ろうね」ともっばら未来を信じて楽しんでいきます。ころも連句会今後ともよろしく。

二十韻「たふの峰」の巻 捌 加藤治子

夏雲の輿踏み行くやたふの峰

若葉をもる光まぶしき

白壁の蔵の扉は開きぬて

壊れたオルガンぶかぶかと鳴り

十六夜に故郷を偲ぶ宣教師

宝くじ買ふ秋の街角

川渡り猪の群出たさうな

ただひたすらに老いらくの恋

弾むよにカルサン穿いた伊豆娘

夜の波止場に潮の満ちくる

ナ月出でて鯨鯨鍋の縄暖簾

マスクをはづし放つ濁声

都合よく忘れ上手の身となりて

速水昌子様をお偲びして

中島 啓世

七月も末の頃、鳴立庵の鍋島様から速水昌子様が七月十一日に心臓発作で亡くなられたとのこと、あまりのことに呆然としてしまいました。まだ四十九歳という若さで、陰の濃い美女、お茶の水女子大出身の才媛で、国立病院内科医長の格別におやさしい御主人と二人の成人の坊ちゃまに守られ、毎日を連句に俳句、小鼓に謡曲、水彩画とお好きなお稽古ごとに明け昏れ、それぞれを深く掘り下げられてのお勉強。その上あらゆる人に、労を惜しまない親切の積み重ね、例の一つに正式俳諧の時の丁寧な記録、私は殊にビデオテープのダビングまでしていただき、大変お世話になりました。

昌子様は、ACC連句教室の第二期生として八年ほど前に入って来られました。御息の受験などのため一年半ほどで一度おやめになりました。最近の三年程はお子様も落着かれ、お友達二人を誘って鳴立庵、猫蓑会鎌倉の会へと御出席になり始め、喜んでをりましたところ、やはり車の事故の後遺症等のため体調を崩され、又々皆缺席とのこととなりました。歌仙なら初折の花で勿体なくも散ってしまわれ、あげ句まで行っていただきたかったのに残念でなりません。

御遺族、ことに大切なお年頃に母上を亡くされた御息のため少しでもお役に立ちたいと祈ってをります。お墓は長岡の名利法蓮寺にもおありとか（御実家）、お通りがかりの折には、おまいり下さいませ。

笠着

歌仙 「秋祭」

式田和子 捌

- 一 亜麻色に暮れて十番秋祭
- 二 樽太鼓に新涼の月
- 三 枝豆を箆にたつぷり茹であげて
- 四 算数國語せかす宿題
- 五 沓脱ぎに野良猫いつもかたまれる
- 六 バルキーセーター手首すっぽり
- 七 宗谷沖砕氷船に乗り組みぬ
- 八 鵲を見れば思ひ出すひと
- 九 軟らかな飯が好みと炊いてくれ
- 十 だらだら坂を降りきった家
- 十一 配当の目減りに布施も薄くなり
- 十二 野外映画に子供いっぱい
- 十三 半月のブルーサイドに佇みて
- 十四 アラビアの夏戦争の夏
- 十五 玻璃越しの王の木乃伊の身じろぐや
- 十六 度務係り消す古き伝言
- 十七 花冠ひろげ酒樽担ぎ込み
- 十八 去らぬ姫蛇傘持ちて追ふ
- 十九 命名の紙も眩しき春障子
- 二十 家族旅行にデラックスバス
- 二十一 雪早し山の容の交らざる
- 二十二 嫁の病氣は気の病なり
- 二十三 さはりたいさはらせたいの身ハッ口
- 二十四 離れられないクンバルシート
- 二十五 左右からレーザー光線はつぱと
- 二十六 消防士でも迷ふ路地裏
- 二十七 厨房に今や男も入るてふ
- 二十八 織部信楽唐津常滑
- 二十九 白い月残して夜の明けてゆく
- 三十 こんなところにしめじ見付けて
- 三十一 ハロウィンの門に基金の箱を持ち
- 三十二 エコロジストが鯨討論
- 三十三 お茶運ぶからくり人形せんまいで
- 三十四 匠の菓子配り物にし
- 三十五 満開の花に颯爽武豊
- 三十六 耕すひとのちよつと一服

平成二年八月十四日首尾

於麻布十番ブルーベティ2

連衆 中川哲 六澤篤子 雑賀遊 鈴木美奈子 船本志紅 大隅笑人 早坂浩 早坂方子 佛淵健悟

美和哲悟美遊哲遊悟紅篤遊篤 浩篤遊紅悟哲和篤 笑人紅篤悟哲篤

【Q】連句では「花」の出る場所が決つていますが、「花」が発句に出てしまった場合、「花」の座に来た時どのようなにすればよいのでしょうか。又、「紫陽花」や「無花果」のように、花という文字が一部に使われている場合の「花」の句の出し方についてもお教え下さい

(「卯の花連句会」木場田文夫)

【A】「花」は歌仙では二箇所、二十韻では一箇所ですが、その出る場所も決つており、これを「花の定座」といいます。

歌仙の場合、「花」が発句もしくは引き上げられて定座の前に出たら、初折の「花」の定座にはもう「花」は出せません。名残の「花」(句いの花)には、「花」を出すことになりません。(註)

次に二十韻の場合ですが、この場合は「花」は一箇所しかありません。そして、この「花」が発句に、または引き上げられて出た場合、もともと「花の定座」と挙句とは、大体春の季語になる公算が大きいのですが、この場合は「花」にかわる、たとえば「桜」とか「柳」とか、あるいは「桃の花」、「松の花」など、そこが本来なら「花の定座」であることを他人に意識させるだけの賞禄のある季語を用いて付けるのがよいとされております。

たとえば「竹剪りし短冊受けや花の冷え」を発句とする二十韻では、「花の定座」には、「咲きみちて濃きも淡きも紅枝垂」という句が付いております。これなど、「紅枝垂」は桜の一種であります。既に発句に「花の句」が出ていたため、ここでは「花」という語を避けたものであります。「紅枝垂」という桜でさえも「花の句」(正花ともいいます)として認められない

のですから、その他の草や木の花も正花として認められないのは当然でしょう。梅も桃も牡丹も菊も、その他四季折々に咲く花は、すべて美しく愛すべきものですが、それを梅(梅の花)、桃(桃の花)などと詠んだ場合には、それは梅・桃などそれぞれの花の特性を述べる意が主となります。

「花の句」は一卷の飾りであり、特に華やかで麗しいものを珍重・賞讃する意をこめるべきものとされておりますから、右のように梅・桃・牡丹・菊その他、それぞれの花の特性を述べただけでは、華やかで麗しいものを特に珍重・賞讃する意が籠められていないとして、「正花」には用いられません。

おたずねの「紫陽花」や「無花果」なども、「梅の花」、「桃の花」、「菊の花」というものと同様に考え、取り扱うべきで「花の定座」以前に、このような語が用いられたら、定座には「正花」を出すべきであります。「連句入門」四十八頁を御参考下さい。

(註)現代われわれの連句は多く歌仙・二十韻の季題配置表によって作られています。だから歌仙で初折の花が引き上げられた場合は「花の定座」は春の季になることが多いので、この場合は二十韻の場合と同様に処理すべきでしょうが、芭蕉時代の作品は、この場合、他季となったり雑となったりすることもありました。「麦をわすれ花におぼれぬ鷹ならし」(曠野)の発句に対して、初折の「花の定座」には「明るやら西も東も鐘の声」という句が付けられており、「兼好も薙織りけり花ざかり」(炭俵)という発句に対しては、「漸と雨降りやみて秋の風」という秋の句が付いていますので参考して下さい。

杉内 徒司

新庄市の北陽社(春秋庵系・笹白舟主宰)の芦洲庵内田素舟氏は昭和二十四年北陽社に入り、四十五年十二月十三日立机したが、当日の記念歌仙の立句及び脇句は左記の通り。

北陽に紅白の梅咲き揃ひ 白舟
友集ひ来る広き春園 保雄

そして、その説明文に以前から句集の選評を依頼してきた春秋庵鈴木保雄宗匠に脇を付けてもらったが、春秋庵も高齡となり、その後は共に音信不通で、これが最後となっている。

(「芦洲庵句集と書留帖」)

今年(平成二年)九月十四日、第二回全国連句新庄大会に参加した折、素舟氏にきいてみると、保雄宗匠に一度も会ってはいないという。

私が宮脇昌三氏の依頼で保雄氏に、宮脇氏が十月頃会いたい旨を電話で傳へたのは四十五年九月六日である。その年四月に上田市で加舎白雄研究会が発足しているから、宮脇氏は白雄資料を得たかったのであろう。加舎白雄研究会が「加舎白雄全集」上・下巻を上梓したのは四十九年三月である。

西武線の高麗駅で下り上總屋製材所に鈴木保雄氏を訪ねたのは四十六年三月十八日。帰られた後というので、居合わせた子息の昇氏から父君のことをすこし伺った。

鈴木家は深川で鈴木セメントを経営していた。丸ビルの建設には鈴木セメントが使用されているそうだ。会社が盛城セメントに合併された後は木場で材木問屋になった

という。保雄氏は蔵前の高等工業窯業科を出て(濱田庄司の一期後輩)、現在は製材所を営んでいる由。私はその足で西武線下落合の鈴木家に向った。

鈴木家のベルを押すと、パッと点いた門灯に春秋庵という小さな扁額がうつし出された。保雄氏の父が春秋庵三森幹雄の門人であった関係から幹雄の長男準一氏(府立五中の体育の先生)は鈴木材木店の職場俳句の指導にきていた。やがて春秋庵準一氏が老齡となったので、無理やり春秋庵主にさせられたという。従つて連句は自信がないので目下修業中であると笑いながら語られた。春秋庵から受継いだものは、玄関の春秋庵の扁額と、木彫の印形一つだけだと私の質問に答えられた。

それから数年後、保雄宗匠の訃報を耳にしたからお会いしたのは一度きりになってしまったが、あの日の帰りに頂いた春秋庵準一著の「連句の実際指導」は今も実作に大いに役立っている。

編集者より

○御執筆の先生方には慌ただしいお願い申し上げます。ご迷惑おかけしました。お蔭様で、何とか期日までにお届けすることが出来ました。ここに感謝致します。

○「ねこみの」は、普段ご一緒出来ない俳席や連衆の方々の、活動の様子をお伝えする通信です。親しめるものにしたと思っています。よろしくお願ひします。

季刊「ねこみの」通信 創刊号
発行者 猫養連句会
印刷所 アトリエ・ネコ